
烙印

いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烙印

【Nコード】

N5348F

【作者名】

いろは

【あらすじ】

大学4回生の晩秋、人生に行き詰まり、自らの資質に、将来に、苦悩していた。そんなある日、1通の封筒に目を留めた。

ぼんやり、自転車を押して歩くのが心地良かった。

あれは、僕がまだ塾でアルバイトをしていた頃の事だから、初夏の事だった筈だ。

塾が終わるのは、6時30分前後で、帰り道、自転車を押して歩くのが常だった。

その頃は、もう風の中にも空の色にも夏が忍び込んでいて、世界が若々しく感じられた。

そんな季節の夜、耳に音楽を流し込むのがその頃の一番の愉悦であった。

『今宵の月のように』とか『風に吹かれて』とか『漣』、『名もなき詩』…等々。

屹度、現実逃避に近かったんだろうと思うが、そういう時、少しは人生の渋みというか、

命の輝き……人間的充実の様なものを確かに感じていた。

その当時、レポート、就活、アルバイト、卒論…色んな事に追われていた。

何をするにも、億劫で、レポートを言い訳に就活を怠り、アルバイトを言い訳に卒論を怠り、

就活を言い訳にレポートを怠り…そんな調子だから、実際に就職をしなければならぬ時に至って、

すっかり弱ってしまって、冷汗三斗、阿鼻叫喚、青息吐息の体たらく。

履歴書の書き方だの、SPIだのクレペリン、エントリーシートの書き方すら祿に調べていないものだから、

書類段階、或いは筆記試験で落とされる。

今になって漸く事の重大さに気が付いたが、後の祭…時既に遅し…。

更に追い討ち…。サブプライムローンの影響での世界的大恐慌…！
内定取り消しをする企業まで出る始末。

そんな最悪な情勢の中、まともな羅針盤も無い儘に船を漕ぎ出さなければならなかった。

正に風前の灯であった。

晩秋。日の落ちるのは、日に日に早くなり、夜の空は、冷たい空気の中に月が映え、

風は人を芯から凍らせる程の冷気を含んでいた。

いつもの様に大学から安普請のアパートに帰ると、数枚の郵便物があつた。

DM（一度行つたきり二度と行かないカラオケ店のものと、流されて行つた合同説明会で話を聞いた企業のものでした）が2枚、それから茶封筒が1枚。

特に目新しい事もない。僕は、何の興味も何の考えもなく、無造作にその中身を確認した。

中には見覚えのあるマークが描かれているのが認められた。

確か…高校の校章。

裏返して見ると、どうやら同窓会のお知らせの様だった。

母校の名が記されている…3年2組。久し振りに見た文字列に、何故か切ない様な、懐かしい様な、不思議な心持ちがした。

二

「千里、数Aの試験どうだった？」

初夏の優しい光の中で大人びた低い声が、やにわに僕の耳を脅かした。

土屋文規。高校入学以来の友人で、クラスも三年間ずっと一緒だった。

尤も、僕らのクラスは文系二類は、スライド式で、文理の変更の無い限り離れる事は無いのだが。

土屋は、どこか取っつきにくい雰囲気があったが、僕には何故かクラスの誰よりも話しやすかった。

また、非常な俊秀で後に京大法学部に首席で合格した程だった。

それでいて、自分の能力を鼻にかけるでもなく、無暗に謙遜する訳でもなく、

自然体：嫌味の無い、スカツとした気持ちの好い奴だった。

「78だったよ。土屋は？」言いながら土屋に視線を寄越した。

土屋の顔には幽かに笑みが認められた。

「99」おいおい、殆んど満点じゃん…と、思わず心の中でつつこむ。

「不本意だけどな」ちよつと、腑に落ちない様な表情を作って見せてから、答案用紙を僕に向けた。

丸だらけの答案用紙。小学校の頃の試験みたいだな。そんな事を考えながら間違いを探す。

『問い8(3)15』と走り書きされた上を朱色でバツされている。確かここは15で正解じゃなかったかな。考えながら、模範回答に目をやる。

やっぱり、15と明記されている。

「何これ？ミスじゃないの？言ってきたら？」

「いや、7に見えたそうだ」

「はあ？」言われてみれば、7に見えなくもなかった。

「結局、俺の詰めが甘かったって訳だ。こっというのが一番駄目……命取りになりかねない……」

土屋は半ば独り言の様に呟いた。

「大袈裟だなあ」僕は少し笑ってそう言った。

「そうでもないさ。いつまでもこんなミスしてる場合じゃないからな」

極論、生きるか死ぬか、そこまで考えているんじゃないかと思えるくらい真面目な顔でそう言った。

その時、僕は不図視線を感じて、後ろを振り返って見た。

然し、感じた筈の視線は、ふつつり切れてしまった。その後、視線を感じる事も無い儘にチャイムが鳴った。

三

昼休み。僕は決まって旧校舎にある美術室を利用した。

僕が美術部に所属している（実際的には、幽霊部員だったが）為、自由に出来たのだ。

また、文化祭前を除いては殆んど活動停止状態のクラブだったから、昼休みに態々部室に来る様な部員は皆無だった事も一つの要因だ。従って、この教室はほぼ僕らの私物と化していたのだ。

例に拠って、僕らはその日も美術室に足を運んだ。

「暑いな」僕は教室に入って開口一番に呟いた。

「うん。じき夏だな」土屋は、教室の窓を開けながら答えた。

窓の外に並ぶ樹木は、いかにも夏らしい若葉を茂らせていた。その葉を揺らす風も既に夏めいていた。

「夏か…土屋は夏休みどうするんだ」

「夏の予定？ある訳無いだろ」

「ふーん。まあ、塾行つてないもんな。それ以前に必要無いし」

「ああ、塾は行かないけど勉強は多少するぜ。一応受験あるからな」
「多少って…全国 of 受験生が必死になるのに」

「それは、積み重ねて来なかった奴の話だろ。サボって楽な道に流された。同情なんぞする余地無し」全く、剣もほろろな口調である。

「うーん…まあ、正論なんだけどさ…積み重ねて来なかった、俺みたいな奴にとつては、痛い言葉だな」

「クク。ま、これから積み上げていけば良いんだよ。年にいっぺんくらい真面目になつてさ」

「実際夏が勝負だもんな」

独り言の様に呟いた。今からでも大丈夫、これからやればそれで。そんな土屋の言葉を信じたかったのだ。

その時、窓外から、再び視線を感じた。

窓の外を一瞥したが、対面した校舎には数名の生徒がいるばかりで、その内の誰かがこちらを見ていたのかどうか、そんな事は丸で分からなかった。

「どうかしたのか？」不思議そうに土屋が聞いた。

「いや…」視線を感じたのが僕の勘違いかも知れないという事を考慮して、土屋には敢えて黙った。

土屋は、特にそれ以上詮索しなかった。恐らく、これ以上僕が何も言わないのを察したのだろう。

「そう言えば、次の授業って何だっけ？」土屋は、アナログ式の古びた腕時計に目を落としながら言った。

「えーと。金曜の5限だから…あつ体育じゃなかった？今何時だ？」

「1時10分」悪戯な表情で土屋が答えた。

「なっ…後5分しか無いじゃん！早く行こうぜ！」

慌てて僕は立ち上がった。然し、慌て過ぎた罰で、椅子に向こう脛を強かにぶつけてしまった。

「っ……！！」声にならない程の激痛が走った。

「ははは。千里、慌て過ぎ」土屋は、腹を押さえて笑っている。

「おい、本当は何時なんだ？」睨み付ける様に土屋の顔を見る。

「悪い、悪い。本当は1時ちよつと前だ」

やっぱり。土屋のあの悪魔的な笑みの意味をもっと深く考えるべきだった。

そうして、土屋の虚偽を見破るに至りたかった。

「全く。何でそういう事するかな」

「でも、千里はすぐ騙されるなあ」

土屋の顔にはまだ悪戯な笑みが残っていた。

「まあいいや。どっちにしても、あんま時間無いし、行こうぜ」

こんな事もよくあったが、不思議な事にあまり腹は立たなかった。

多分、少なからず土屋を尊敬していたからだろう。

単純に勉強が出来るとか、ルックスが良いとか、そういう分かりやすい部分でなく、もっと人間的な部分で、人間として尊敬していた節があった。

僕は空っぽの美術室を後にした。

残された教室の窓外では、午後に傾いた太陽が、青い空に高く上り、教室の中を暖かく照らしていた。

四

3年の体育は前期と後期で種目を選択するという方式が採られていた。

男子は、サッカーとバドミントンとバスケットボールの3つ。

中学の頃一応入部していた（部活が強制だった為に所属していたに過ぎませんでした）バドミントンを選択していた。

全18名、6人1組で3つのグループに分けられ、ダブルス3組が作られていた。

そのグループで僕は、岡田遥輝と組んでいた。岡田は、理系クラスに在籍しており、確かバドミントン部に所属していたと記憶している。

数学が得意だったが、英語はからっきし駄目で後は標準。

大人しかったが、気が優しくて良い奴だった。

グラウンドに出るとまだ岡田の姿は無かった。

仕方ないので、土屋を相手に軽く打ち合いをする。

「そう言えばさ、土屋ってどこ行くの？」

「何が？」

「何って大学だよ」

「ああ。お前とおんなじとこ」

「…あのなあ…真面目に答えるよ」

「はは。一応京大」「そうなん？東大じゃないんだ」

「うん。東京嫌いだから…あ、受かる自信はあるけど」

「嫌いつて…」僕はそれが妄言でも、虚勢でも無いことを知っていた。

そうして、好き嫌いで大学を決めるなんていうのは、特別な人間、数限られた人間にだけ許されているのだということも。

土屋は、東大か京大でなく、全ての大学から選んで京大と言っているのだ。

何となく力が抜けた。その時打ったシャトルは、ふらふらとなだらかに下降して、

土屋のラケットに届くことなく力尽きた。

「土屋君」

土屋がペアを組んでいる（グループを決めた際、阿弥陀籤で決まりました）久保田美貴だった。

「折角ペアになったんだから、一緒にやろうよ」

無邪気な笑顔が眩しかった。しかし、こんな風に、土屋に話し掛ける女子は久保田くらいだったろう。

「あ、そっか。岡田君がまだ来てないのね」

「ああ」無愛想に土屋が答えた。

それでも気にしていない様子で、久保田は、人差し指を下唇に軽く当てて、思案する様にして

「じゃあ、藤本君も一緒にやらない？」と言った。

久保田は誰にでも優しいから、僕にも気を遣ってそう言ってくれているのは分かっているのだから、

女子と話す機会自体少ない僕には、その優しさがくすぐったい様な、痛い様な心持ちがした。

「え…俺…？俺は…」

その時、岡田が来ているのに気が付き、「あ、岡田来たから」と言っただけでそそくさと逃げ出した。

自分でもしどろもどろの、醜態を演じたのが、判然と分かっていたが、どうにもならない。

そうして土屋が笑いを堪えているのを背中に感じた。

五

シャトルは、高く弧を描き、僕と岡田の間を往来する。午後の薄くなつた空の色に、白いシャトルが、映える。

「岡田、知ってる?」

「ん?何を?」

「土屋の...」

進路、と続けようとする、岡田は僕の言葉が結ばれるのを遮って言った。

「やつぱり? そうだよなあ。あいつ頭良いしな、うん。それに結構見た目も...」

「何? 知ってたのか?」

「いや、見てれば大体分かるよ。俺、そういうの目敏いんだよ」

「見てれば? そういうものかなあ?」

「まあ、土屋は、ポーカーフェイスだから、あれだけどころはもう確実だと思つてたよ」

「え? どういうシステム?」

「そりゃ、久保田からアプローチしたんじゃないかって事だよ」

「いや、ちよつと待つて。何かごちゃごちゃしてきた。何で久保田が出てくんの?」

「だから、土屋と久保田が付き合つてるつて話じゃねーの?」

「はあ? そんな話じゃないつて。大体いくらなんでも、そんな事ある訳無いだろ」

「いや、土屋はどうか知らんけど、久保田は、絶対好きだと思うな。」

「そうかなあ」

「ん? じゃあ藤本は何の話しようとしてたんだ?」

「ああ、いや、進路の話。京大だつてさ」

岡田は、一瞬ぎよつとした表情になった。

「へえ？東大じゃないんだ」

「何か東京が嫌いとかなんとか」

「何だよ、その理由。俺が土屋だったら迷わず東大に行くのになあ」
僕はくすくす笑った。

「だよなあ」

「京大か」岡田は少し遠い目をしていた。

不図気が付くと、久保田の視線がこちらに向いていた。

一瞬間、僕と久保田の視線が絡んだ。そうして、すぐに二人の視線は別へ向いた。

その頃から、以前感じていた視線は、久保田から発せられていたのではないかと疑い始めた。

六

12月20日。午後6時00分から。明朝体で書かれたその書面に視線を寄越す。燦然と輝く晩秋の月がそれを照らしていた。

扱、どうしたものだろうか……。久し振りに土屋にも会いたい様な、気もするが……。自分なんか行って良いものかどうか……。

あの頃、時々感じた視線の事を考える。

不図、久保田の嘘みたいな、無邪気な笑顔が過った。

また少し、あの頃が懐かしくなつて、気恥ずかしい様な心地がした。あれから皆、どうしたかなあ？そんな事が、気になった。

あの頃、クラスメイトがこの先どうなるか、と考えた事など無かつたのに。

そんなノスタルジックな感傷に浸りながら考えた。

そう言えば、卒業アルバム……。あれは何処に仕舞つたつけ？

少しでも気にかかるとういけなかつた。

気が付くと、筆笥だの押し入れだの引っ掻き回して探している。

結局押し入れの奥深くからそれは発見された。貰った時、パラパラと眺めた程度だったから、実際見るのは初めても一般だ。

クラスメイトは流石に覚えていたが（まあ、見覚えがあるというレベルですが）、

他のクラスとなると名前は勿論、見た覚えすら無い奴が大半だった。暫く、見ていると、あるページで手が止まった。

個人写真のページの後に、そのクラスで生徒同士、自由に撮影された写真が散りばめられているのだ。

見開き1ページだが、かなり量がある。その中に、僕と土屋、それから久保田。

三人で写っている写真があった。

そう言えば、僕も何枚か撮ってもらった記憶はあるのだが、ディテールは忘却していた。

その写真を眺めている内に、ある奇妙な発想に突き当たった。

久保田は土屋が好きなんじゃないかって、岡田は言ってたけど、実は違うんじゃないだろうか？

現に視線は、土屋に向けられたものじゃなかったんだから。

あの頃、考えもなかったけど、ひょっとしたら久保田は、僕が…？

いつの間にか夜は更け、月が圧倒的な力で以て世界を照らしていた。

僕はその下を、11月の頬を切る風を受けて郵便ポストに返信の葉書を入れた。

闇の静寂の中に、葉書が手を離れ、ポストの内に

吸い込まれる様に落ち込む音が妙に響いた。

七

あれから、徒にざらざらと月日は流れて12月20日になった。

腕時計に目をやると5時30分を指している。

少し早いか、と思ったのだが、会場には既に半数くらい集まっていた。

会場をうろろしていると、背中に懐かしい声をかけられた。

「久しぶりだな。くく…全然変わってないな」

「そういう土屋こそ」

見目形は、丸で高校時代の儘に見えた。敢えて言えば峭刻な顔つきが少々強調されたくらいのものだった。

「でもさ、千里はこういうの来ないかと思ってたよ。クラスでもグループから離れてる様などこあったし」

「いや、それ言うなら土屋の方だよ。クラスで誰かと喋ってんの殆んど見なかったぜ」

「そうだったかな」

「全く…相変わらずだな」

腕時計を一瞥すると5時45分になっていた。

会場をざっと眺める。久保田らしき姿は見受けられなかった。

「あのさ、岡田って覚えてるか？」

「え？ああ覚えてるけど…何だよ突然」

不思議そうな目をする土屋に構わず続ける。

「岡田が昔変な事言ってたなあって…ちょっと思い出したから」

「変な事？」

「久保田は土屋好きなんじゃないかって。」

恐る恐る土屋の表情を読み取ろうとする。初めは呆気に取られた様

な表情をしていたけれど、

次第に、何か思い当たったらしく表情に幽かな笑みが忍び込んだ。

「ふゝん。成る程な」

「…何？」

「詰まりさ、千里は久保田が好きなんだろう？」

「…え？いや…」

顔の紅くなるのが自分でも判然と分かった。

「分かりやすいな。抑、久保田が俺に気があるらしいって、千里がそんな事

態々言うなんておかしいからな」

全くの凶星だから、僕はただ黙って土屋の高説を聞いていた。

「今日は屹度、久保田も来る筈だから、聞いてみるよ」

「え？今日？態々？！」

「大丈夫だつて。多分向こうも気があるって」

「そうかなあ」

「俺の勘じゃ大丈夫だ」

そんな話を話していた時、不意に背を軽く叩かれた。

そこには、昔の儘の花の様な笑みを香らせる久保田が立っていた。

八

「久し振りだね。藤本君」

「ああ…うん…」

よく見ると薄化粧をしているのに気付いて、時の流れを感じた。急に心臓の音が耳に聞こえる程大きくなった。

「土屋君も」

久保田は僕から、目線を土屋に移した。その上目遣いになった美しい顔が、

僕の目には妙に艶かしく映った。

「久保田はさ、就職決まった？」

土屋は無愛想な調子で、尋ねた。

自分がまだ内定無しだから、極力避けていた話題だった。

また久保田の就職先が、良いところだったら、益々手の届かないものになるという予覚もあったのだ。

やにわに久保田の表情が変わっていった。

「土屋君は？」

「院にいくつもりだけど」

「そうなんだ。土屋君、頭よかったもんね」

「久保田はどうするんだ？」

土屋は、勘づいているのか知らないが、僕には先の事を聞かなかったのは、ともかく有り難かった。

「んーん。そうじゃなくって…」

久保田は言いよどんでいたが、終いには、信じられない様な事実を告白した。

良い企業に就職が決まっていたという方が、どんなに幸せだったろうか。

「私ね、結婚してるのよ」

今の今まで、仄かな、淡い期待を抱いていたのが、その一言でがらと打ち崩された。

それから、言葉が水のように流れて、内容がなかなか頭に入って来なかった。

高校を卒業して直ぐに、親の決めた相手の所へ嫁いだのだという。高校の頃には、既に全てが決まっていた、自由な僕らが羨ましかったという様な事を言っていた。

元々、些細なきっかけから、好意を持ったに過ぎないが、僕は自棄になってしまつて、随分酒を飲んだらしかった。会が始まつた後の事は、塵とも記憶に無い。

気が付いた時は、風の吹き荒ぶ夜道を一人で自転車を引きながら歩いていた。

やつぱりいつもの様にイヤホンからは大音量の音楽が流れていた。

久保田は、永遠に手の届かない、高嶺の花だと思い知らされた様だった。

それに、久保田にしろ、土屋にしろ、ちゃんとこれからの道が見えている。

僕だけが、未だにふらふらと彷徨っているんだと思うと、恐怖と情けなさで涙が溢れてきた。

額に地獄の焼き印を押された様な感覚だった。

僕は、酷い咎人なのではないかと思えてならなかったのだ。

誰からも拒絶されている、被害妄想かも知れないが、或いは…。

夜風は刻々と強くなり、遂に吹雪になった。

それは、僕の弱々しい身体に、耐えられない程の痛みを与えたのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5348f/>

烙印

2010年10月28日07時45分発行